

-1962:December-

# あころ

創刊号



鹿児島県立鶴丸高等学校生物部

巻頭言「あこり誕生」	顧問	宮地伸夫	3頁
心臓と搏動	13 ROOM	八並幸夫	4
ごまだらちよりの越冬幼虫の飼育	22 R	津之地浪穂	6
霧島採集旅行	19 R	中内孝雄	7
熱帯魚の飼育	29 R	宇和誠一	9
霧島採集旅行の夜	11 R	青山昌二	10
桜島の植物	29 R	向静代	11
採集記	24 R	吉国清子	21
霧島採集旅行観察記	13 R	前田宗浩	22
血液型判定	34 R	中間幸敏	26
アコウと私	顧問	越山正三	28
部記			
部員名簿			
編集後記	24 R	大園正行	30

(表紙説明) 表紙原図・越山正三先生

あこり *Ficus Wightiana* Wall

クワ科の常緑喬木。

葉は緑色又は黄緑色で、長楕円形又は狭長楕円形。

柄は長さ3~6cm。葉身は長さ7~12cm。幅3~5cmで両端は共に円く側脈は6~9対で、やや平行している。

果実はイチジクに似た球形で径6~8mm短柄をもっている。

高さ20mにも達する大木にもなり枝から気根を出し、それが地中にはいりこんで、新しい幹となる。古い大木は、気根のために親本の幹がわからぬほどである。

紀伊半島の海岸、四国、九州等の沿海暖地、琉球台湾、中国に分布する。

鹿兒島には、そうとう数の「あこり」の大木があり特に錦江湾側の磯の大木群は、南の島々から渡ってきた鳥のふんの中の種から自生したものといわれ、いずれも高さが十数mもあり、その下は、夏の昼さがりなどは、とても良い休憩地である。

## 巻頭言

### あ　こ　う　誕　生

顧問　宮地伸夫

昨日は桜島には初雪が積つた。草木のしたたるような緑は色あせ、一年の生活を今まさに閉じようとしていることに気がつく。そういえば、右へ左へ飛びかつたトンボや美しい蝶の姿も何時のまにか消えてしまつてゐる。淋しい冬がやつて来たのだ。

こういう時に「あこう」の誕生を見るということは、生の親たる生物部員は勿論、それを知るすべての人が、恰も暗闇の中に一筋の光を見出した時のような気持ちで喜んでゐるに違いない。生まれる子はもはや、♂男でも♀女でもよい。五体揃つて健康であればそれでいいのだ。

常に鶴丸高校生らしい学究の精神を忘れることなく、野外に出れば大自然のふところに溶けこみながら、生命現象を、たとえその神秘のベール越しにでもふれて見る。そしてその結果を持ちより活字に表わし、人にも知らせ、また自分も人から学ぶ手段として「あこう」は今生まれた。中に盛られる内容は堅苦しいものである必要はない。従つて幼稚園の児童が興味を持つようなありふれた内容でも、その事項に真剣な態度で取り組み、科学的に忍耐強く観察し、生命の神秘に少しでもふれることができればそれで充分である。形式に捉われ真理の追求を忘れてはならない。

やがて春になれば、自然界は花が咲き乱れ蝶が飛びかい、あおむしは地をはいまわるだろう。大自然はこの地球を所狭しとその生命の躍動を始めるのである。そしてこの「あこう」もまた、次々に根を張り枝葉を伸ばし花を開き実を結ぶことであろう。皆でこの「あこう」をゆらぐことの無いそして美しい大木に成長するよう育てて行こうではないか。

1962年/2月6日

# 心 臓 と 博 動

13R 八 並 幸 夫

十一月七日、文化祭である。僕は今日はキモグラフの実験を公開しなければならなかつた。

キモグラフの実験とは心臓のハク動をグラフに表わす実験である。

準備として紙に、キシロールを燃やして出る油煙で黒くすすをつけてすす紙を作る。

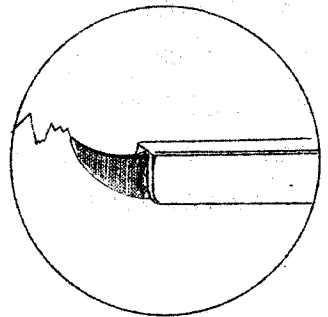
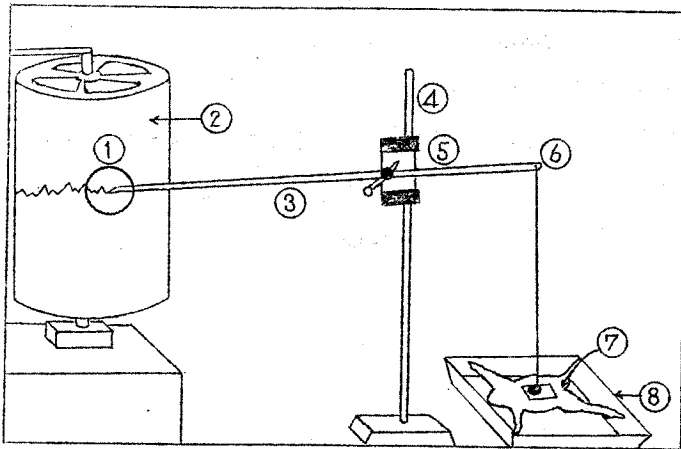
すす紙をキモグラフィオンにはりつける。

これから実験の方法と説明を経過順に書いていく。

まず「かえる」をエーテルで麻醉させる。この実験に使う「かえる」は「ひきがえる」か「とのさまがえる」のような大きめの物がよい。

次にそれを解剖皿の上に背位に固定して、胸部の皮膚にすこしメスを入れ、ピンセットで摘み上げながらメスの切口からはさみで、心臓あたりの皮膚を切り取つて胸部を露出する。

次に剣状胸軟骨の先端に小さな切口を作り、胸部をピンセットで摘み上げながら、はさみを平らに胸腔部に挿入し、右斜上および左斜上に切り上げ、鳥喙骨に達せしめる。さらに鳥喙骨に沿つて横に切断して三角形の窓を開ける。すると心囊の下にハク動している心臓が見える。心臓を傷つけぬようピンセットで心囊を摘まみ上げて切り、腹部を圧すると心臓が孔から露出してくる。



①図の拡大

- 【ノ図】 ②キモグラフィオンのすす紙  
 ③竹 ④スタンド ⑦かえる  
 ⑧解剖皿

○各部の説明

③の竹は30cmの細い物を選び⑥から10cmの所⑤に錐であなを開けてピンでスタンドに可動式にとりつける。

竹の先端①は写真用のフィルムを1.5cmぐらいに切りしごいてはめる（これは小さな動きも鋭

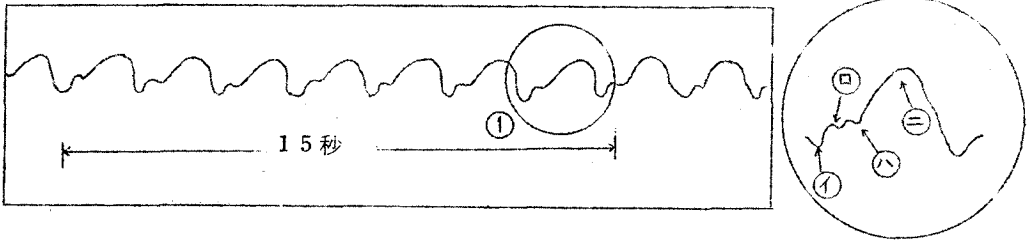
敏にとらえるため)

竹は①の方が重いため常に下がっている。⑥と「かえる」の心臓とは糸でつなく。

心臓を糸でむすぶ方法にSTANNIUS氏結紮というのがありますが、うまくゆかなかつたので、小針をつり針状にして心臓の最突端に軽く引つかける。

⑧の解剖皿の中には心臓を長持ちさせるために、「かえる」がひたる程度に生理食塩水を入れる。

○心臓およびグラフの説明



〔2図〕心臓のハク動グラフ（実験原図）

①の拡大図

- ㊦ 休止期
  - ㊧ 静脈洞
  - ㊨ 心房
  - ㊩ 心室
- の収縮を示す

「かえる」の心臓は、他の両生類と同様に二心房一心室から成っている。

右心房に左右および後の三大静脈が開口する部分がある。これを「静脈洞」という。

そして全身より来る静脈血をこの右心房が受け、左心房は肺よりくる動脈を受け、心室で混合する。

「かえる」の心臓のハク動はまず洞部が収縮し、房部がやや遅れ、さらに遅れて室部が収縮する。この心房心室の収縮する期間を「収縮期」と言い、弛緩する期間を「弛緩期」という。

この連続した両期間のつきにハク動のない期間すなわち「休止期」がある。

才2図のグラフでは㊦が「休止期」 ㊧の山は静脈洞の収縮 ㊨の山は心房の収縮 ㊩の山が心室の収縮を示すが、今回の実験では心房の収縮を表わす山が少ししか出なかつたのでその最も良く書けたのを記載した。 大体、七回の収縮弛緩をするのに十五秒かかっていた。故に1つの収縮弛緩運動に約2.1秒かかつたと見てよい。又、心臓は約4時間後に止まつた。

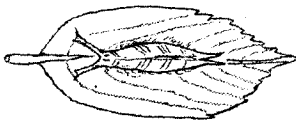
ただハク動をグラフに書くだけでなく、これに薬品を入れてグラフの変化を見たり、又、一匹の「かえる」で心臓が止まるまでのグラフを一つにまとめてみたいと思つている。これは次の機会にやることにして僕の実験説明を終わります。

## ごまだらちよりの越冬幼虫の飼育

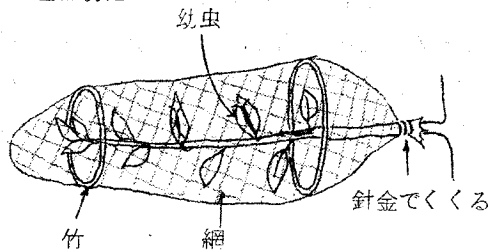
22R 津之地 浪 穂

「鹿児島県の蝶類」の中で「ごまだらちよう」の越冬幼虫の飼育記録が全部失敗に終わっていたので、私の飼育記録を記載してみます。

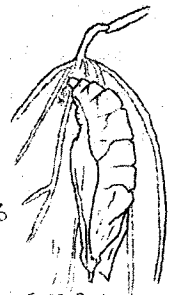
- Ⅱ・16-1961〔土〕 先輩の田中章さんと市内加治屋町の公園の「えのき」の根元で「ごまだらちよう」の越冬幼虫2匹を採集。
- Ⅲ・29-1961〔金〕 自宅（日置郡松元町）付近の「えのき」の樹下を探したところ、南に面した根元の部分で幼虫一匹を採集。
- これらは褐色のナメクジ型で体身約2.5cmある3令幼虫であつて、越冬するために食樹である「えのき」の樹下において、その落葉の裏側で眠っていたものである。〔図1〕
- 家に持ち帰り、紙箱に入れて軒下にかかげておいた。
- Ⅲ・27-1962〔火〕 幼虫が触角を30°ぐらい持ち上げているのを発見。
- Ⅳ・1-1962〔日〕 幼虫は眠りから完全にさめたらしく寝台であつた落葉をはなれてきた。が「えのき」の新芽が萌えていないので、そのままにしておいた。体色は緑色がかかる。
- Ⅳ・8-1962〔日〕 「えのき」の新芽が1~2cmになつたので、枝に網をかけて3匹をはなす。〔図2〕
- これからはずつと、網内の葉を食い尽した時は他の枝に網とも移す。
- Ⅴ・2-1962〔水〕 網の中で1匹死ぬ。（原因不明）
- Ⅴ・2-1962〔水〕 1匹目葉裏で前蛹になる。
- Ⅴ・3-1962〔木〕 1匹目蛹化 〔図3〕（枝を折り飼育箱に移す）
- Ⅴ・9-1962〔水〕 2匹目 前蛹
- Ⅴ・10-1962〔木〕 2匹目蛹化（これも飼育箱に）
- Ⅴ・15-1962〔火〕 1匹目羽化
- Ⅴ・21-1962〔月〕 2匹目羽化



〔図1〕



〔図2〕



〔図3〕

# 霧 島 採 集 旅 行

19R 中内孝雄

7月20日(1962年)

終業式で終わった後、生物部は霧島へ採集のために出発した。午後4時30分頃霧島神宮に到着した。それからバスで湯之野へ向つた。天気が曇りがちだったのでチョウはあまり見ることはできなかつた。

霧島に多くはえているクガイソウ(30cmほどの高さで白い花が咲き、その花は下にたれている)には、ツマグロヒヨウモンやアカタテハが見られた。

また湿気の多い陰になつている所には、キバネセリが数頭群をなして飛びまわつていた。夜になると水銀燈のまわりには、ガや甲虫が何千匹も飛んでいた。石の下には甲虫が卵を産みつけているのも見られた。

7月21日

午前4時30分頃キンマミドリシジミを採集するために出かけた。行くときはまつ暗で足下がやつと見えるくらいだったが、新湯の辺まで来ると夜もあけて来たが霧が多く雨も降り出してきた。去年キンマミドリシジミを目撃したらしい地点まで行つてアカガシの木をゆすつて見たが何もみられなかつた。

そして雨のために大浪池登山口の辺で引き返した。

午前8時30分頃また、大浪池へ向つて出発。雨が降つていたためにチョウはあまり出て来なかつた、クガイソウやコアカソにはサカハチチョウがすばやく飛びまわつていた。

午後からは空も晴れて、雨もやんで来たが、チョウは少ししか出て来なかつた。

7月22日

今日で採集旅行もおしまいだ。朝から採集に適したからりと晴れた天気だつた。

湯之野から高千穂までの採集。タテハチョウ科のものが多く、イシガキチョウ、クモガタヒヨウモンなどが大空を飛びまわつていた。またミヤマカラスアゲハ、アオバセリなどが多く飛びまわつていた。

アカガシの木をゆするとルーミスジミらしいものが2頭飛び出した。

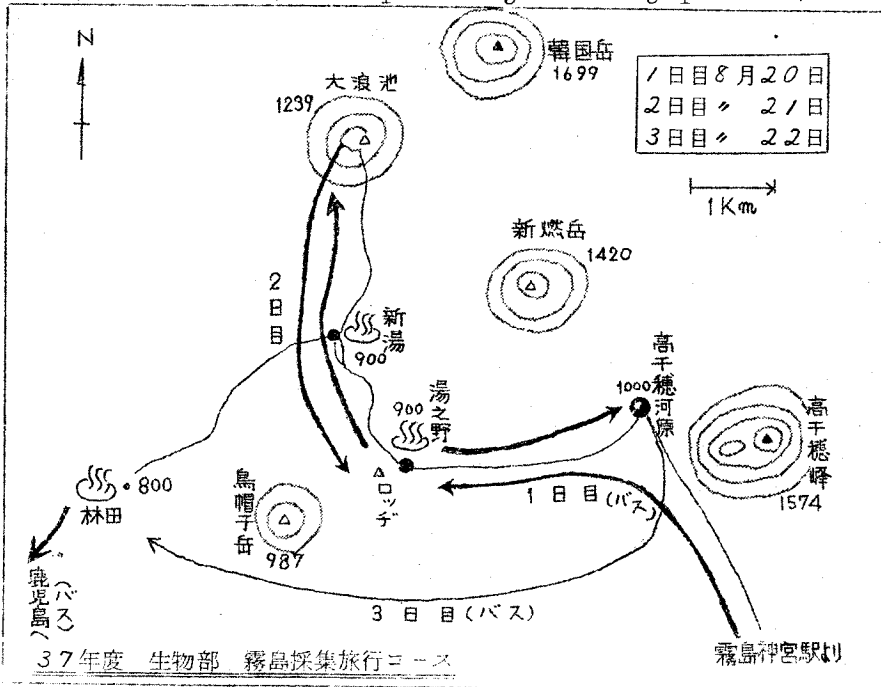
この日は最後の採集日にふさわしくチョウも多く天気もたいへんよかつた。

## ※ 霧 島 採 集 記 録

○7月20日-1962年

アカタテハ	( <i>Vanessa indica</i> )	1頭
ツマグロヒヨウモン	( <i>Argyreus hyperbius</i> )	(♂) 2頭
ウラギンヒヨウモン	( <i>Argyreus adippe pallioscens</i> )	1頭
ジャノメチョウ	( <i>Minois dryas bipunctatus</i> )	2頭

キバネセセリ	( <i>Bibasis aquilina chrysaeglia</i> )	2頭
7月21日-1962年		
アオスジアゲハ	( <i>Graphium sarpedon nipponum</i> )	1頭
ミヤマカラスアゲハ	( <i>Papilio maackii satakei</i> )	1頭
サカハチチヨウ	( <i>Araschnia burejana strigosa</i> )	6頭
ミドリヒヨウモン	( <i>Argynnis paphia geisha</i> )	1頭
ツマグロヒヨウモン	( <i>Argyreus hyperbius</i> )	(♀) 1頭
ベニシジミ	( <i>Lycaena phlaeas daimio</i> )	1頭
7月22日-1962年		
ミヤマカラスアゲハ	( <i>Papilio maackii satakei</i> )	3頭
イシガキチヨウ	( <i>Cyrestis thyodamas mabella</i> )	7頭
イチモンジチヨウ	( <i>Ladoga camilla japonice</i> )	1頭
ウラギンヒヨウモン	( <i>Fabriciana adippe pallescens</i> )	2頭
オオウラギンスジヒヨウモン	( <i>Argyreus lysippe</i> )	1頭
ウラギンスジヒヨウモン	( <i>Argyronome loadice japonica</i> )	2頭
ミドリヒヨウモン	( <i>Argynnis paphia geisha</i> )	3頭
クモガタヒヨウモン	( <i>Argynnis anadyomene midas</i> )	1頭
ベニシジミ	( <i>Lycaena phlaeas daimio</i> )	2頭
アオバセセリ	( <i>Choaspes benjaminii japonica</i> )	2頭





## 熱帯魚の飼育（ベタの産卵と孵化）

29R 宇和 試 一

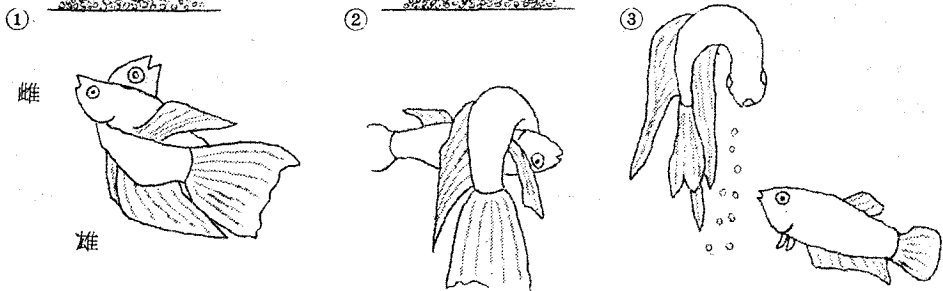
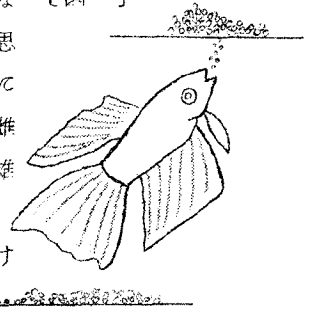
今から二年ほど前であつたが、熱帯魚を飼つていた。たいへんかわいらしく何時間見ても厭きなかつた。そして水槽の縁をたたくと餌をくれるのかと思つて水面に近よつてくる。色々と苦勞もあつたけれど楽しかつた。ここにはその時觀察したベタの産卵と孵化のことを書いてみよう。

○ベタの番を買つた。買つた時雌は卵をもつていたので、産卵の用意をしてやつた。産卵の用意と言つても水槽に水草をたくさん植えるだけである。やがて雄は巢とな

る泡を水面に吹きはじめた。はつきりしないが二、三日だつたと思ふ巢が出来上がつた。そして雄は酔を広げ体をくねらせて雌を巢の下にさそつた。はじめは雌はなかなかさそいにのらなかつた。もしこの時雌が全然雄のさそいに応じないと雄は雌を殺してしまうそうだ。そして雄は雌の体をくるみそのまま沈んで行く途中で雌が数十箇の卵を出す。

卵はそのまま沈んで行くが、こんどはそれを口にくわえて巢にくつつけ

【図二】 ベタの産卵



る。大変な重労働である。そんなことを約二十回くらい繰返した。卵を産み終わると雄は雌をじやま者として追立てる。そしてこの時もし水草が少なかつたら雌は雄に殺されてしまうそうだ。僕は雌をすぐ出してやつたので、雌が殺されるということにはなかつた。又雄はずつと卵につきつきりて卵を守り、時々卵が下に落ちるのを口にくわえて運んだ。雄は眠る暇があつただろうか。こんなにして約一日半くらいで卵が透明になり、二日くらいで孵化した。そして巢の下にぶらさがつている。まださいのうがついているので泳げない。稚魚の大きさは3~4ミリくらいでおたまじやくしを小さくしたようなもので大変なやうない。それでも孵化してから5~6日もするとさいのうがとれて、ちよろちよろと泳ぎ出す。それが又大変かわいい、そして餌は鶏卵やうずらの卵をみぬきにして黄味だけを水にとかしてスポイトで少しずつやる。この頃になると、自分で泳げるので雄は、はなしてやつた。又ある時余り餌をやりすぎ、水が腐つて困つたこともあつた。こうして体もだんだんと大きくなり、餌も卵から細かい粉餌、普通の餌と変つて成長して行つた

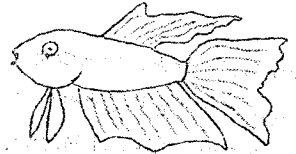
が、後までのとつたのは、たつた二匹だつた。そのほかののは、どうなつたのか消えてしまつてしまふからない。

【図三】ベタの發育過程

① 生後4~5日

② 生後2週間~3週間

③



## 霧島採集旅行の夜

ノルム 青山 昌二

七月二十日ほくたちは湯之野に泊まつた。

その日は雨の降つたあとらしく地面はまだしめつてじめじめしていた。湯之野ロッヂの近くの労災病院の庭に水銀燈があり、そのまわりは普通の公園ぐらいの原っぱになつていた。その夜ほく達はそこで昆虫の採集をした。霧が大変濃かつたが、水銀燈はまばゆく明かるく光つていた。これにたくさんの虫が集まつていた。それがふしぎなことには「ガ」の大群である。甲虫など数えるほどしかいなかつた。しかし水銀燈の下にころがつている石をひつくりかえてみるとそこにはたくさんの「すじこがね」が卵を産んでいた。風が吹くたびに霧が濃くなつたりうすくなつたりする。霧が濃くなると「ガ」がますますふえるのである。またその大群が水銀燈の上から下へ下から上へとせわしく動いているのである。どういうわけでそんなに上下にうごいているのかふしぎでたまらなかつた。

その翌日の夜は昨夜とかわつて霧はなく空は晴れていた。そして昨日はあんなにたくさんいた「ガ」は見あたらず、それにかわつて甲虫がたくさん来ていた。その水銀燈のまわりにはよりつけないほどである。「ガ」は病院の白壁に多少とまつていた。ほくたちは飛んでいる虫をどんなにしてとつてよいかわからず空にむかつてただ網を振りまわすだけである。しばらく振りまわして網の中を見ると、こがねむしなどをはじめいろいろの甲虫がはいつていた。そんなにたくさんの虫を毒びんに入れるわけにもいかず、ビニールのふくろに入れた。その中で虫たちがごそごそ動くので気持がわるかつた。しまいにはほくたちの服の中にもまではいつてきたので、時採集をやめた。それほどたくさんの虫が飛びまわつているのである。その夜ほくらはロッヂで採集したたくさんの昆虫を全部調べた。それは【どらかねふいふい-Anomala Cuprea Hope】  
あおどうがね Anomala albopilosa Hope. 【きすじこがね】phyllopertha irregularis Waterhouse. 【こがねむし-Mimela Splendens Gyllé-  
【みやまくわがた】【ひらがたくわがた】【こふきこがね】【かぶとむし】などであ

そして農薬の影響で昆虫がすくなくなつたというのがこんなにいると思うとありがたいやらきのどくやら。。。。

## 桜島の植物

29R 向 静代

これは卒業生池田豪憲さん（鹿大農学部1年）の鶴丸時代の記録と現生物部員の記録に基いてかいたものです。

オ1回 1961年 4月23日 天候 曇

採集同行者： 越山正三先生， 園田 肇， 池田豪憲， その他六人

採集場所： 赤水， 嶺原， 野尻付近を中心に採集

オ2回 1961年 5月28日 天候 曇のち雨

採集同行者： 池田， 上石田

採集場所： 袴腰， 小池

オ3回 1961年 6月18日 天候 晴

同行者： 上に同じ

採集場所： 白浜～高免～黒神

と以上3回にわたつての桜島採集でしたがまだまだ取得されてない多くの植物があり，その上なにしろ桜島といえば承知の通り活火山であり，毎日の灰の降る量はたいした物です，灰をいっばいかぶつての採集ですから，どんな苦心して採集してるか皆さんも納得できることと思います。

### 採 集 目 録

#### きく科

あさのさりんそう	<i>Solidago virga-aurea</i>
おうあわだちそう	<i>Solidago serotina</i>
ひめじしぱり	<i>Ixeris gracilis</i>
にがな	<i>Lactuca dentata</i>
つわぶき	<i>Ligularia tussilaginea</i>
やくしそう	<i>Lactuca denticulata</i>
よもぎ	<i>Aster yomena</i>
ははこぐさ	<i>Gnaphalium multiceps</i>
ちちこぐさ	<i>Gnaphalium indicum</i>
かにたひらく	<i>Crepis raponica</i>

きりなのせんだんぐさ	<i>Bidens bipinnata</i>
あめむかしよもぎ	<i>Erigeron canadensis</i>
はるのげし	<i>Sonchus oleraceus</i>
のげし	<i>Sonchus oleraceus</i>
ききよう科	
ひなぎきよう	<i>Wahlenbergia gracilis</i>
うり科	
みやまにがうり	<i>Schizopepon bryoniaefolius</i>
からすうり	<i>Trichosanthes cucumeroides</i>
おみなえし科	
おとこへし	<i>Patrinia villosa</i>
すいかずら科	
つくしやぶうつぎ	<i>Weigela japonica</i>
すいかずら	<i>Lonicera japonica</i>
はくさんぼく	<i>Viburnum japonica</i>
にわとこ	<i>Sambucus Sieboldiana</i>
あかね科	
やえむぐら	<i>Galium Aparine</i>
へくそかずら	<i>Paederia chinensis</i>
おうばこ科	
おうばこ	<i>Plantago major</i>
きつねのまご科	
きつねのまご	<i>Justicia Gendarussa</i>
なす科	
じやがいも	<i>Solanum tuberosum</i>
くこ	<i>Lycium chinense</i>
くちびるばな科	
きらんそう	<i>Ajuga decumbens</i>
とうばな	<i>Clinopodium gracile</i>
くまつづら科	
むらさきしきぶ	<i>Calliarpa japonica Thunb</i>
くさぎ	<i>Clerodendron trichotomum</i>
はまごう	<i>Vitex rotundifolia</i>
おうむらさきしきぶ	<i>Callicarpa japonica Thunb var luxu-</i>
くさぎ	<i>Phyla japonica</i> rians

やぶむらさきしきふ	<i>Callicarpa mollis</i>
むらさき科	
きゆうりぐさ	<i>Trigonotis peduncularis</i>
ひるがお科	
はまひるがお	<i>Calysiegia Soldanilla</i>
がかいも科	
かもめずる	<i>Cynanchum Dichinsii</i>
きようちくとう料	
ていかかずら	<i>Trachelospermum asiaticum</i>
きようちくとう	<i>Nerium indicum</i>
ふじうつき科	
こふじうつき	<i>Buddleja venenifera</i>
ひひらき科	
ねずみもち	<i>Ligustrum japonicum</i>
つつじ科	
しやしあんぼ	<i>Vaccinium bracteatum</i>
さたつつじ	
さくらそう科	
こなすび	<i>Lysimachia japonica</i>
おかとらのお	<i>Lysimachia clethroides</i>
いちやくそう科	
いちやくそう	<i>Pirola japonica</i>
みずき科	
くまのみずき	<i>Cornus brachypoda</i>
からかさばな科	
はまぼりふり	<i>Glehnia littoralis</i>
やつばぜり	<i>Apium Ammi</i>
やぶじらみ	<i>Torilis Anthriscus</i>
つぼくさ	<i>Genetella asiatica</i>
みつばぜり	<i>Cryptotaenia canadensis</i>
やぶにんじん	<i>Osmorhiza aristate</i>
にんじん	<i>Daucus</i>
あかばな科	
つきみそう	<i>Oenothera tetraptera</i>

ざくろ科	<i>Punica granatum</i> L.
ざくろ	<i>Punica</i>
ぐい科	<i>Elaeagnus pungens</i> Sieb. & Zucc.
なわしろぐみ	<i>Elaeagnus pungens</i>
あきぐみ	<i>Elaeagnus umbellata</i> Sieb. & Zucc.
つるぐみ	<i>Elaeagnus glabra</i> Sieb. & Zucc.
すみれ科	<i>Viola mandshurica</i> Maxim.
たちつぼすみれ	<i>Viola grypoceras</i> Maxim.
すみれ	<i>Viola mandshurica</i>
おとぎりそう科	<i>Hypericum japonicum</i> Thunberg
ひめおとぎりそう	<i>Hypericum japonicum</i>
おとぎりそう	<i>Hypericum erectum</i> L.
つばき科	<i>Thea sinensis</i> (Sw.) O. Kuntze
ちや	<i>Thea sinensis</i>
ひさかき	<i>Eurya japonica</i> (Sw.) Nakai
はまひさかき	<i>Eurya emarginata</i> (Sw.) Nakai
もつこく	<i>Ternstroemia japonica</i> (Sw.) Nakai
つばき	<i>Camellia japonica</i> L.
あおい科	<i>Hibiscus syriacus</i> L.
むくげ	<i>Hibiscus syriacus</i>
あおぎり科	<i>Firmiana simplex</i> (Sw.) Nakai
あおぎり	<i>Firmiana simplex</i>
ほるとのき科	<i>Elaeocarpus siluestris</i> (Sw.) Nakai
ほるとのき	<i>Elaeocarpus siluestris</i>
ぶどう科	<i>Vitis ficifolia</i> (Sw.) Nakai
えびづる	<i>Vitis ficifolia</i>
つた	<i>Parthenocissus tricuspidate</i> (Sw.) Nakai
のぶどう	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Sw.) Nakai
にしきき科	<i>Celastrus orbiculatus</i> (Sw.) Nakai
てりばつるうめもどき	<i>Celastrus orbiculatus</i>
まさき	<i>Euonymus japonica</i> (Sw.) Nakai
もちのき科	<i>Ilex chinensis</i> (Sw.) Nakai
ななめのき	<i>Ilex chinensis</i>
はせのき科	<i>Rhus trichocarpa</i> (Sw.) Nakai
はせ	<i>Rhus trichocarpa</i>

とうだいぐさ科	
かんこのき	<i>Glochidion obovatum</i>
あかめがしわ	<i>Mallotus japonicus</i>
なんきんはぜ	<i>Triadica sebifera</i>
ひめはき科	
ひめはき	<i>Pohy gala japonica</i>
せんたん科	
せんたん	<i>Melia</i>
みかん科	
いぬざんしょう	<i>Fagara mantchurica</i>
ざんしょう	<i>Xanthoxyn piperitum</i>
からたち	<i>Poncirus trifoliata</i>
かたばみ科	
むらさきかたばみ	<i>Oxalis martiana</i>
かたばみ	<i>Oxalis coxniculata</i>
まめ科	
にせあかしや	<i>Robinia pseudo-Acacia</i>
ねこはぎ	<i>Lespedeza pilosa</i>
のあずき	<i>Dunbaria villosa</i>
くらら	<i>Sophora angustifolia</i>
はまなたまめ	<i>Canavalia lineata</i>
くず	<i>Pueraria hirsuta</i>
こまつなぎ	<i>Indigofera pseudo-tinctoria</i>
めどはぎ	<i>Lespedeza cuneata</i>
みやまはぎ	<i>Lespedeza cyrtobotrya</i>
はまえんどう	<i>Lathyrus maritimus</i>
やまふじ	<i>Wistaria brachybotrys</i>
からすのえんどう	<i>Vicia sativa</i>
みそをおし	<i>Desmodium Caudatum</i>
なつふじ	<i>Millettia japonica</i>
ぬすびとはぎ	<i>Desmodium racemosum</i>
ふじ	<i>Wisteria floribunda</i>
やぶまめ	<i>Amphicarpala Edgervorthii</i>
しばはぎ	<i>Desmodium Buergeri</i>
ふうはるははぎ	

やはずそう	<i>Microlespedeza striata</i>
ねむのき	<i>Allizzia Julibrissin</i>
ひめくず	<i>Dunbaria villosa</i>
すずめのえんどう	<i>Vicia tetrasperma</i>
かすまぐさ	<i>Vicia tetrasperma</i>
いばら科	
しやりんばい	<i>Rhaphiolepis umbellate</i>
もも	<i>Prunus</i>
なわしろいちご	<i>Rulus paruifolius</i>
うめ	<i>Prunus mume</i>
ながばきいちご	<i>Rhaphiolepis dulcis</i>
のいばら	<i>Rose multiflora</i>
ふゆいちご	<i>Rubus Buergeri</i>
やまざくら	<i>Prunus donnarium</i>
ほうろくいちご	<i>Rubus Sieboldi</i>
なし	<i>Pyrus</i>
くまいちご	<i>Rubus Wrightii</i>
やぶいばら	<i>Rose Onoei</i>
とべら	<i>Pittosporum Tobira</i>
まんさく科	
いすのき	<i>Distylium racemosum</i>
ゆきのした科	
まるばうつき	<i>Deutzia sieboldiana</i>
こんてりき	<i>Hydrangea scandens</i>
あじさい	<i>Hydrangea macrophylla</i>
べんけいそう科	
ともちまんねんぐさ	<i>Sedum buldiferum</i>
じゅうじばな科	
じやけんじん	<i>Cardamine impatiens</i>
たねつけばな	<i>Cardamine flexuosa</i>
まめぐんばいなずな	<i>Lepidium virginicum</i>
ぺんぺんぐさ	<i>Capsella Bursa-pastoris</i>
けし科	
たけにぐさ	<i>Macleya cordata</i>



くすのき科	
たぶ	<i>Machilus Thunbergii</i>
くす	<i>Cinnamomun Camphora</i>
やぶにつけい	<i>Cinnamomum japonicum</i>
しろだも	<i>Neolitsea sericea</i>
もくれん科	
さねかずら	<i>Radsura japonica</i>
つづりふし科	
あおつずらふじ	<i>Cocculus trilobus</i>
はすのはかすら	<i>Stephania japonica</i>
あけび科	
むべ	<i>Stauntonia hexaphylla</i>
あけび	<i>Akebia quinata</i>
きんぽうげ科	
たがらし	<i>Ranunculus sceleratus</i>
せんじんそう	<i>Clematis terniflora</i>
うまのあしがた	<i>Ranunculus japonicus</i>
なでしこ科	
まんてま	<i>Silena gallica</i>
みみなぐさ	<i>Cerastium caespitosum</i>
のみのふすま	<i>Stellaria Alsine</i>
はこべ	<i>Stellaria media</i>
ひゆ科	
いのこづち	<i>Achyranthes japonica</i>
やまごぼろ科	
ようしゆやまごぼろ	<i>Phytolacca americana</i>
あかさ科	
ありたそう	<i>Chenopodium ambrosioides</i>
ふだんそう	<i>Beta vulgaris</i>
たて科	
いたどり	<i>Reynoutria japonica</i>
つるそば	<i>Polygonum chinense</i>
はるたで	<i>Polygonum persicaria</i>
すいば	<i>Rumex Acetosa</i>
とけてね	<i>Polygonum senticosum</i>

そば	<i>Fagopyrum esculentum</i>
いぬたで	<i>Polygonum Blumei</i>
おういぬたで	<i>Polygonum nodosum</i>
うまのすずくさ科	
おうばうまのすずくさ	<i>Aristolochia kaempferi</i>
うまのすずくさ	<i>Aristolochia debilis</i>
ほろほろのき科	
ほろほろのき	<i>Senoeffia jasminodora</i>
いらくさ科	
さいかいやぶまお	<i>Boehmeria pannosa</i>
こけみず	<i>Pilea peploides</i>
からむし	<i>Boehmeria nivea</i>
くわ科	
いぬびわ	<i>Ficus erecta</i>
おういたび	<i>Ficus pumila</i>
ほそばいぬびわ	<i>Ficus erecta thunb</i>
まぐわ	<i>Morus alba</i>
にれ科	
えのき	<i>Celtis sinensis</i>
ぶな科	
くぬぎ	<i>Quercus acutissima</i>
あらがし	<i>Quercus glauca thunb</i>
いたじい	<i>Shiia Sieboldii</i>
かばのき科	
せしやぶし	<i>Alnus firma Sieb</i>
やなぎ科	
やまやなぎ	<i>Salix Bakko</i>
らん科	
ねじはな	<i>Spiranthes sinensis</i>
にらばらん	<i>Microtis formosama</i>
あやめ科	
にわぜきしょう	<i>Sisyrinchium angustifolium</i>
やまいも科	
やまいも	<i>Dioscorea japonica thunb</i>

ゆり科

さるとりいはら

*Smilax china*

のびる

*Allium nipponicum*

そくしんらん

*Aletris spicata*

ほととぎす

*Tricyrtis hirta*

つゆくさ科

つゆくさ

*Commelina communis*

かやつりくさ科

あいだくぐ

*Kyllinga brevifolia*

ちやがやつり

*Cyperus amuricus*

あぶらしば

*Carex satsumensis*

あおすげ

*Royleana Nees*

はますげ

*Cyperus rotundus*

くぐ

*Mariscus Sieboldianus*

ひめくぐ

*Kyllingia brevifolia*

ほもの科

かにつりぐさ

*Trisetum bifidum*

しば

*Zoysia japonica*

いとすずめがや

*Eragrostis atrovirens*

めだけ

*Plioblastus Simoni*

ぬかほ

*Agrostis perennans*

ごうほうしば

*Carex pumila*

かずのこぐさ

*Bechmannia erucaeformis*

からすむぎ

*Auena fatua*

らしのしつべい

*Hemarthria sibirica*

ひめこばんそう

*Briza minor*

すすき

*Miscanthus sinensis*

いとすすき

*Miscanthus sinensis Anders*

あしほそ

*Microstegium*

かものあし

*Ischaemun crassepes Thellung*

とほしから

*Festuca parvigluma Stend*

きょうきしば

*Cynodon Dactylon pers*

ちがや

*Imperata cylindrica Beauv*

だんちく

*Arundo Donax*

かもじぐさ

*Agropyrum semicostatum*

いたちがや	<i>Pogonatherum crinitum</i>
おぼろしの	<i>Nipponocalamus akasiensis</i>
こちちみざさ	<i>Oplismenus japonicus</i>
ごきだけ	<i>Nipponocalamus distichus</i>
すずめのとつぼう	<i>Alopecurus aequalis</i>
なぎなたがや	<i>Festuca myuros</i>
こぶなぐさ	<i>Arthraxon hispidus</i>
やたけ	<i>Pseudosasa japonica</i>
ひめしば	<i>Digitaria ciliaris</i>
ほていちく	<i>Phyllostachys bambusoides</i>
こごめかぜくさ	<i>Eragrostis japonica</i>
ほそむぎ	<i>Lolium perenne</i>
まつ科	
くろまつ	<i>Pinus Thunbergii</i>
ひのき	<i>Chamaecyparis obtusa</i>
すぎ	<i>Cryptomeria japonica</i>
いちい科 (いぬまき科)	
いぬまき	<i>Podocarpus macrophylla</i>
かにくさ科	
かにくさ	<i>Lygodium japonium</i>
うらじろ科	
こしだ	<i>Gleichenia dichotoma</i>
うらほし科	
いので	<i>Polystichum polyblepharum</i>
あまくさしだ	<i>Pteris dispar</i>
げじげじしだ	<i>Dryopteris decursive-pinnata</i>
いのでもどき	
ほらしのぶ	<i>Sphenomeris chusana</i>
たましだ	<i>Nephrolepis cordifolia</i>
いのもとそう	<i>Pteris multifida</i>
わらび	<i>Pteridium aquilinum</i>
いしかぐま	<i>Microlepia strigosa</i>
ひとつば	<i>Pyrrosia lingua</i>
とらのおしだ	<i>Asplenium incisum</i>
たちしのふ	<i>Onychium japonicum</i>

ほしだ

Cyclosorus acuminatus

とくさ科

すきな

Equisetum arvense

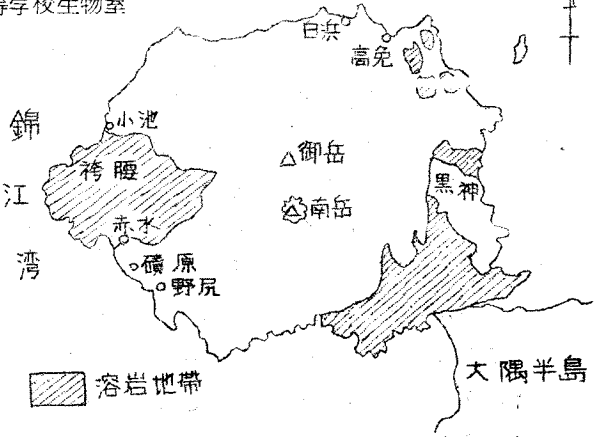
以上72種の植物標本となりましたが、これから先、私達生物部員が完全にしらべ尽くすいきごみでやつてゆきたいと思つています。

標本在所 鹿児島市加治屋町鶴丸高等学校生物室

桜島全図

1/20万

溶岩地帯



採集記

24R 吉国清子

S, 36, 11, 3 文化の日 曇

西鹿児島駅発 → 谷山市平川町鳥帽子岳

Member : 税所先生

池田さん・田中章さん・向静代・吉国清子

Tool : 胴乱.....2個 ネット...../

ビニール袋...3個 地図...../

剪定バサミ } .....3個  
根掘り }

9時 西駅発 →

鳥帽子岳 : 5.22m

登山口.....平川駅から約1km

○登山口 : 道路沿いに、高い土手。

それは、粘土によく

た赤土。そこに、苔類

のシギゴケ(セン類)

が一面にはえていた。



おかぶ



めかぶ



胞子のう



[シギゴケ]

山口 ⇒ 200m : 広い山道で左側、低丘があり隣山にも、落花生が植えてあつた。

つわぶき〔さく科〕 *Ligularia ussuriensis*.

くず〔まめ科〕 *Pueraria lobata*.

むらさきしきぶ〔くまつづら科〕 *Callicarpa japonica*.

しのぶ〔うらぼし科〕 *Davallia Mariesii*.

いぬまき〔まき科〕 *Podocarpus macrophylla*

はき〔まめ科〕 *Lespedeza bicolor*

ひかんばな〔ひかんばな科〕 *Lycoris radiata*

ほうきさく〔さく科〕 *Aster subulatus*

中腹 : 山道は急に狭くなり、あたりは、うす暗く光線もはいらずジメジメとした赤土。

シダ類 { ひめわらび〔うらぼし科〕 *Dryopteris oligophlebia*

{ うらじろ〔うらじろ科〕 *Gleichenia glauca*

うめもどき〔もちのき科〕 *Ilex serrata*

ひろはのみみずばい〔はいのき科〕 *Dicalyx tanakae*

午前12:00頃 急に雨。しかし、さらに進む。雨は、本降りとなつたので、急いで下山。

1:00頃 中休みした中腹のところで昼食。

4:00頃 帰宅

○鳥帽子岳に着いてから雨だつたのだが、昆虫班の田中章さんが「たてはもどき」を採集された。

(迷躰)

## 霧島採集旅行観察記

1962年7月20日 前田宗浩

期間 1962年7月20日より同22日まで湯之野を基地として

目的 霧島、特に湯之野、大浪池、高千穂河原を中心とした植物の採集

以下、日をおつて採集した植物を中心に書いていくことにする。

7月22日 鹿児島 晴 鹿児島→湯之野

この日は終業式であつた、しかし式が午前中に終つたので急いで家に帰り、荷物の点検をすませ、2:00頃集合場所の西鹿児島駅へ向い、2:35分の「日南」に乗り霧島神宮駅へ向つた。

神宮駅までには、崖に自生しているユリ科のコオニユリ (*Lilium Maximowiczii* Regei) が目立つた。この種はオニユリ (*Lilium lancifolium* Thunb) に比べて葉面に暗紫色の斑点が無い (②葉がすこし細い、等て区別できる。花茎の花が鮮やかだつた。

田には稲が30cm程に育つていた。私の郷里種子島は稲刈りの準備をしている頃である。居眠りをしながら神宮駅に着くと小雨だった。すぐバスに乗って湯之野に向つた。途中、高千穂河原で小休止をしたが、そこまでの道路は溶岩や、それが風化したらしい赤黒い土で整備されていた。この土もシラス等と同じく養分が少ないだろうと思つた。道端のアザミの葉の上でカラスヘビかとくろを巻いているのを二度ほど見かけた。河原でしばらくバスを降りてまわりを見たが、曇つていたため高千穂峰は見えなかつた。バスの来た道は広葉樹が多かつたような気がした。そこから我々の基地である湯之野へ向つた。途中の谷ではミズキ科のヤマボウシ (*Cornus Kousa* DuRoi) の白い総苞片が木一回を被つて印象的だった。果実は食用だつた。霧島は私にとつて初めてだつたので、バスの中では外の景色を見るのに夢中だつた。

湯之野には四時半頃着いた。河原からの道路は砂利が撒かれてあり、早速すべつた。基地になつた県営湯之野ロッヂは私の想像とは離れていたが、やはり山の感じだつた、荷物をおろして採集を始めた。裏山の小さな岸にはウラボシ科のシシガンシラ (*Blechnum niponicum* Makino) が群生しており、ロッヂの庭にはラン科のエビネ (*Calanthe discolor* Lindl) が山から抜かれて、半ば枯れかけて転がっていた。裏山にはマツ科のアカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc), モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc) の大きな木が、~~あつた~~地獄の北の方角には葉の裏面が白いのですぐ判別できるミズキ科のミズキ (*Cornus copetovarsa* Hemsl), キク科のニガナ (*Dactylis dentata* Makino), ハゼノキ科のハゼノキ (*Rhus Succedanea* L) があつた。ハゼノキに私はかぶれるので用心したが、遂にかぶれなかつた。ちょうど建築中であつた労災病院の入口にはゴマノハグサ科のクガイソウ (*Veronicastrum sibiricum* Pennell) (本種は本州だけにあり、九州にはその変種しかない。) やカゼクサ (*Eragrostis ferruginea* P. Beauv.), チカラシバ (*Pennisetum japonicum* Tanig.) (共にイネ科) 等あつた、夕食をすませて、植物を標本にするべく野冊に挟んで外に出た。外は暗い中に霧が漂つて霧島という名のとうりだつた、昆虫班はその中で「ガ」を採集していた。ロッヂの風呂も白くにごつて本当の山の中の感じだつた。この晩は十時ごろ眠つた。

8月21日 曇、俄雨 湯之野 → 大浪池

当番だつたので朝四時に起きた。朝食をとつたのは七時前で出発は8時頃だつた。ロッヂを出てすぐの橋の所でブナ科のアカガン (*Quercus acuta* Thunb) を採集した。相当古い木だつた。ロッヂから五百mも歩くと、道の右側は高い岸になつており、その下でキク科のフキ (*Petasites japonicus* Miq) を採集した。麓のフキと比べて、とても香りが強かつた。道は川にそつていたがその川岸に生えていたアカマツの大木の枯れた枝にヨコワサルオガセ (*Usnea diffracta* Vain) (サルオガセ科) が着生していた。主に道の右側を歩き、イラクサ科のコアカン (*Boehmeria spicata* Thunb) (葉が赤みを帯びていて大きくない), クマツヅラ科のムラサキシキブ (*Callicarpa japonica* Thunb) (春に薄紫色の花が開き秋に紫色の美しい実がなる), バラ科のワレモコウ (*Sanguisorba*

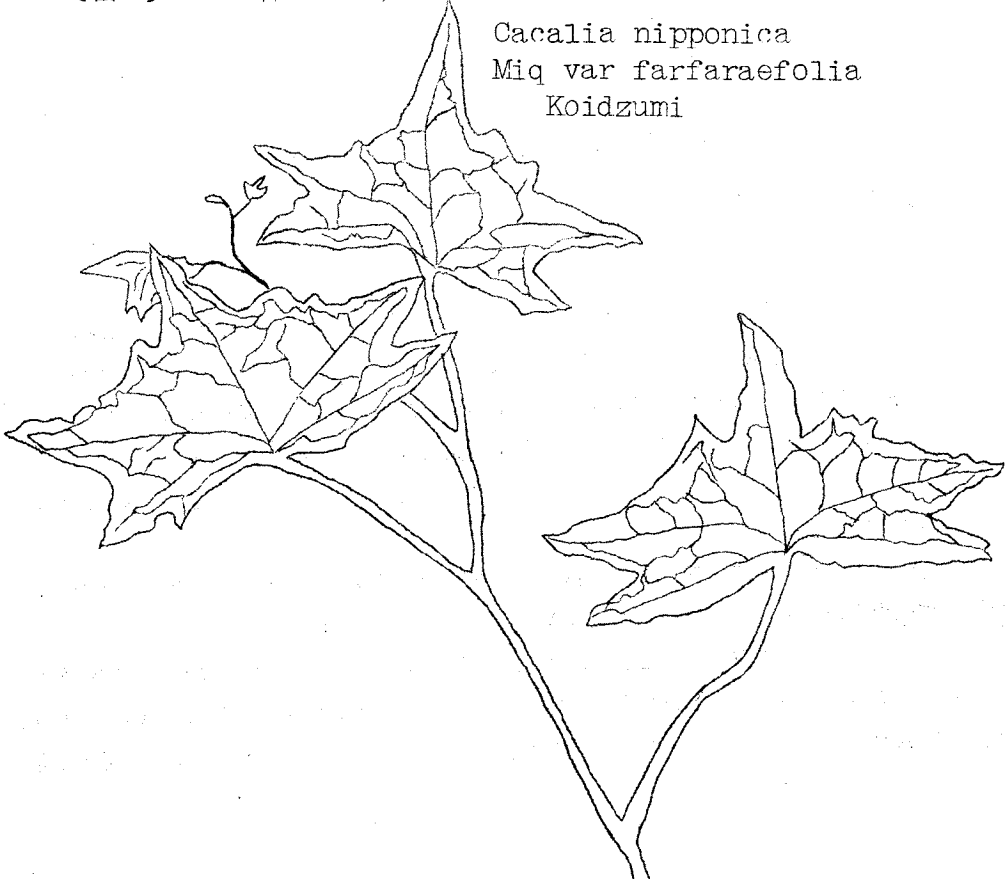
officinalis L. (秋の七草の一つで秋に実が赤く熟する), ミズキ, カエデ科のコハウチワカエデ (*Acer Sieboldianum* Miq) とハウチワカエデ (*Acer japonica* Thunb) (前者が葉は小さく7~9裂し, 後者は9~11裂する。), ユキノシタ科のアカシヨウマ (*Astilbe Thunbergii* Miq) とトリアシヨウマ (*Astilbe odontophylla* Miq) (前者の葉は細く粗な感じで, 花は共に白色) を採集した。道を作るため切りとつた崖の上にはバラ科のナガバモミジイチゴ (*Rubus palmatus* Thunb) があり, 実が熟していた。肘に傷まで作つて試食してみたが, みかん色の果実はとうりい私の家の近所にある野生のカシワイチゴには及ばなかつた。新湯の近くで名のとうり技に刺があるウコギ科のハリギリ (*Kalopanax septemlobus* Koidy), ツクシゼリ, 葉の裏面が白いシロダモ (*Litsea glauca* Sieb) も採集した。新湯に遠からぬ所に谷全体が灰白色の谷があつたがそこには熱気が噴き出している穴があり, その穴にはイオウの結晶があつた。その谷の最も噴出口に近い所に生きていたのはススキだつた。新湯ではサルトリイバラ (*Smilax china* L.) を採集した。これはユリ科でこの葉を端午の節句の餅を包むのに用いる。セリ科のノダケ (*Peucedanum decursivum* Maxim) の若いのも採集した。新湯から目的の大浪池への登山口はすぐだつた。登山路へふみ入るとそこはなかなか整枝されたひのき林でそのひのきの下は蘚苔類が一面に生育していた。その中で青い実がなつているユリ科のヤマジノホトトギス (*Tricyrtis affinis* Makino) とチゴユリ (*Disporum smilacinum* A. Gray) を採集した。共に葉の部分ごとに「く」の字形に曲がつている。檜林の北側は伐採されていたが, モミの若木の芯が切りとられていたのは良くなかつた。登山路に入つてから雨が降り出し, 採集のため立ち止まると小さいアブが群れてきて不快だつた。蘚苔類の中にはスギ, マツ, モミ等針葉樹の苗が自生していた。三叉路に出たが, その付近でユキノシタ科のウメバチソウ (*Parnassia palustris* L) (秋に一株に一輪白い花をつける), ヒカゲノカズラ科のホンバトウゲシバを採集した。これは名を決める時とても迷つたが孢子のうの形でやつと判断した。そこからしばらく歩くと清流が岩をかんでいる谷川の上に出た。そこでキンボウゲ科のヤマオダマキ (*Aquilegia Buergeriana* Sieb. et Zucc) とガガイモ科のアオカモメズル (*Tylophora aristolochioides* Miq), 秋になると美しい赤橙色の実をつけるスイカズラ科のハクサンボク (*Viburnum japonicum* Spreng) を採集した。その谷川にかかつている丸木橋をやつとの思いで渡ると, 今度は高山植物の類に分けられるキク科のコウモリソウが足下に群生していた。大きいやつで30cm位だつた。再び三叉路を左に折れた。そこから大浪池のふちまでは近かつた。折れてすぐ大木の根にからんでいたユキノシタ科のイワガラミ (*Schizophragma hydrangeoides* Sieb. et Zucc) を採つた。これは標本にしたら葉が落ちて困つた。「頂上まで800m」と書いた立て札のあたりは大木だらけで, そこからの急な坂道のそばには竹も生えていた。ノキンノブに比べて根茎が細いウラボシ科のミヤマノキンノブ (*Polypodium ussuriense* Regel) とナナ科のウラジロガシ (*Quercus stenophylla* Makino), ツクバネガシ (*Que-*



reus paucidentata Franch) 後の二つは何れも巨大な木本だった。

【図一】 キク科 コウモリソウ

*Cacalia nipponica*  
Miq var *farfaraefolia*  
Koidzumi



いよいよ頂上まで50mという地点には薄紅色の花崗岩が露出していた。ひどい霧で、大浪池の水面が見えたのは十秒足らずだった。頂上のちよつと下の湧水の所にはモウセンゴケ科のモウセンゴケ (*Drosera rotundifolia* L) (食虫植物), ブナ科のナラガシワ (*Quercus aliena* Blume), 青い実のついていたカバノキ科のヤシヤブシ (*Alnus firma* Sieb et Zucc), 同科のツノハシバミ (*Corylus sieboldiana* Blume), 何れも藪では相当大きくなるはずなのに私の背にも満たなかつた。下山に移つたが, 昆虫班の一人がコハウチワカエデの木よりミヤマクワガタを採集したこと以外に特筆すべき事もなかつたので省略する。ロッヂに帰つて夕食のカレーを食べ終り, 標本の整理を始める頃から私の足が腫れて満足に歩けなくなつた。私の靴がテニスシューズで, 底が薄かつたので, 思わぬ災難に出会つたわけだ。温泉に浸つたらなおるだろうと思つてゆつくり温めて足を高くして眠つた。十時頃だった。

8月22日 晴 湯之野→高千穂河原→帰途

起きようにも足が痛くて起きられず六時ごろ起きた。痛む足を引かずつて地獄池を見学した。

川も池に近い所で育っていたのはカヤツリグサ科の草本だった。やつとの思いで朝食を食べ、リュックを背負うと、足の痛みも引つこんでどうにか歩けた。歩くペースは皆の中間位で青山君と組んだ。前記のヤマボウシのある谷の上へ出たので、後から来た人々と一緒におりて採集した。そのそばのモミの木には実がなっていた。同じ谷で名は忘れたが、ガガイモ科の植物の花がさいているのを見つけ、そつくり採集した。高千穂河原まであと2Kmほどの所でラン科のカキラン (*Epipactis Thunbergii* A.Gray) (花がさいており、それは柿色で美しかつた) サンショウ (*Xanthoxylum piperitum* DC) (これは刺が対に出ているのですぐ分かるミカン科)、アザミミズイブ (穴が熱していたがほとんど虫が食べていた) を採集した。河原にほど近い所で近道をし、アカネ科のカワラマツバ (*Galium Verum* L. var. *asiaticum* Nakai) (葉が細い) を採集した。道に出てまた近道をしたら、こんどは私達の腰のたけほどもある草原で、下にはアザミの大きいやつがあつて、とても苦労し、おまけに迷つて30分ほどさまよひ歩いて、グツタリなつて道に出た。そのまま河原へ歩いていつてバスが来るまで昼寝をした。晴れた空のもとで見ると、河原はさすがに高原という感じだった。帰りは、湯之野を通つて林田温泉を経て鹿児島へバスで来たのだが、その車中では友達の居眠り顔をカメラで撮影した。

反省 ①大体、山に行くのは初めてで、霧島の植物についての知識もそう深くなかつたので、ただ眺めて来たという感じだった。次ははつきりした目標をもつて行きたい。

②22日湯之野—河原間で気付いたことだが道路端に移植されていたミヤマキリシマが枯れかかっている所があつた。枯らすぐらなら自然のままにしておいたほうがいいのではないかと思う。

以上の記録は家に帰つてから書いた日記や整理した標本をもとにして書いたが次回は現地でもつと詳しい記録を書きたいと思う。

## 血液型判定

34R 中間幸敏

我々生物部員は昭和35~37年まで利用して、血液型判定を行なつた。方法は毎年ほぼ同様であつた。

### ①採血法

○人さし指をアルコールで消毒した脱脂綿でふき、次に乾燥した脱脂綿でぬぐいとる。  
○人さし指と親指で相手の指の根元から先の方におさえてきて、親指で爪先をひっかけ消毒した針で軽く突き刺す。——[図ノ]

(この方法が耳からの採血よりも止血の点で簡単である。)

○かようにすると血は自然と出てくるが、もし出ぬ時は強く圧迫するとよい。

この血をガラス棒(両端をバーナでやき丸くしたもの)で両方に採る。

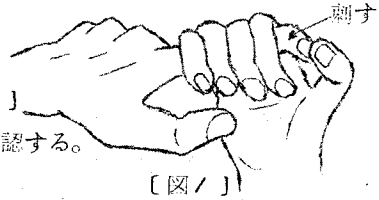
### ②採血方法

- スライドガラスにA型血清（抗B血清）とB型血清（抗A血清）を一滴ずつ二ヶ所に落す。
- これにガラス棒の血を別々に混ぜる。
- 二～三分後結果を検査する。

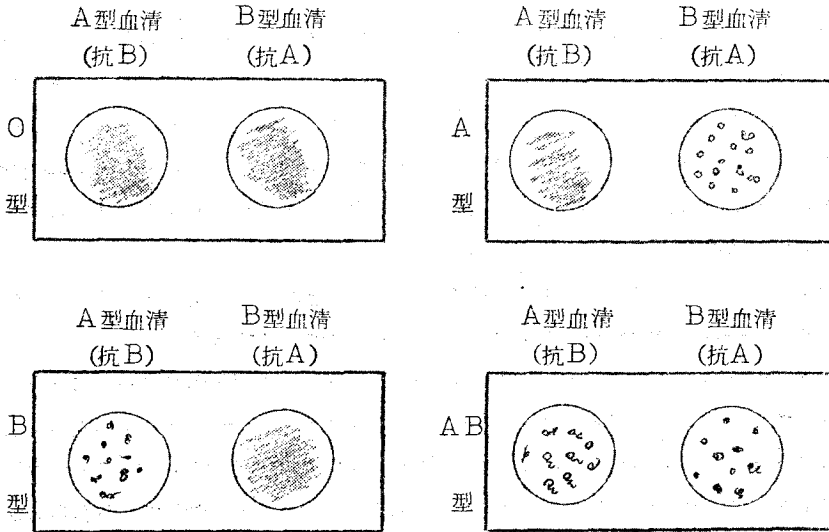
③ 判定結果

○ A。B。AB。O型の四種類に分けられる——〔図2〕

○ 凝集が不確定なものはルーペ又は低倍率の顕微鏡で確認する。



〔図1〕



〔図2〕 血液型の判定

1960～1962年間血液型判定結果

血液型	1960年		1961年		1962年		3年間の%	全国%
	人数	%	人数	%	人数	%		
A	14	37	60	37	132	41	38	38
B	6	17	36	22	59	18	19	22
AB	3	9	22	13	36	11	11	9
O	14	37	45	28	95	30	32	31
計	37		163		322			

## ア コ ウ と 私

顧問 越山正三

私は台湾で育つた。口で味わつたバナナの味と、子供の頃からこの眼で見て来たアコウ木の印象は、私にとってはオニのふる里にもひとしかつた台湾の印象であつた。

アコウの木の桑実果の熟する頃ともなると、この実をついばみに来る小鳥たちの印象で更に思出は聴覚の世界にまでくいこんで来る。

渡り鳥のツグミが群れる頃、空気銃をひつさげて、この木の木蔭に視線を凝らしたものである。台湾固有のツグミ大の小鳥に、白頭（ベタコウ）というのがある。頭の頂点に白い毛がとび出して、愛嬌のある鳥であるが、小鳥の世界の三つの声ではまちがひなく鐘を三つ鳴らすつわものである。この鳥は必ず群翔する。この鳥がたかる頃となれば、そのまま彼らの演奏会場と化してしまふ思である。台湾の人達の胃袋は大した食慾を展開する。豚骨料理や、アヒルの料理の屋台店はアコウの大樹の木蔭によく店を並べてあつた。

高校三年の折、友人三人と共に台湾の東海岸めぐりをしたことがある。交通といえば、道のない海岸の砂浜をゆく、一枚板の大輪を索く、カンクリー牛車の軌む音である。

カナロンという小さなパイワン族の部落に着き、駐在所のお世話で何とか家の一間にありついた。自炊もすまして、山麓にある温泉の湧湯につかりに出かけた。仮小屋があり、男風呂、女風呂と札はかかつていたものの、男風呂にパイワンの女たちが入っていたので、あいていた女風呂の方につかつて、旅のつかれをいやした。陽はもうとつぷり暮れていた。やがて水浴からあがつたパイワンの女たちは、屋外のアコウの木蔭で立話をしながら着換えをしていた。折からのあわい日光のおかげで、浮き彫りになつた女裸形のシルエットは、おとぎの国の妖精のごとくにもみえた。ミケランヂエロや、ロダンの彫刻以上の生きたものの迫力があつた。

シューベルトの歌曲の菩提樹の歌は、ドイツ語を習いおぼえの私共にとつて愛唱歌のひとつであつたが、その菩提樹の哀愁の思を、かそかにもアコウの木にことよせたものである。すなわちアコウこそは私共の青春を色どる菩提樹そのものであつた。

そのような台湾の思出も、終戦の幕によつてとざされてしまつた。

その頃の人達は次々と故人となつてゆき、異境の果ての思出もだんだんうすれてゆく。

そのようなときに、鹿児島でみるアコウ木の姿は、台湾の思い出を現在の私とつないでくれる唯一の存在である。

その種子は渡り鳥が運んでくれたのにちがひない。

東桜島などの海岸の石垣はアコウの気根でがつつちりと抱かれて石垣にはなくてはならない植物となつている。南方ではシーズンがない為、シーズンのないこの植物が、鹿児島のようなシーズンに面喰つて、時ならぬときに新芽を吹かしている。

鳥と共に配給されるアコウの種子が、農家の屋根や、島の石垣の処々に散らばっている。

鶴丸の生物部の部誌名がアコウと決まっておどろいた。私の思い出をシンボライズされてうれしかった。鶴丸の生物部は創立以来地味な活動をしている。卒業生はそれぞれ社会的に活動している。後輩の活躍を部誌を通じて知ってくれよう。亦部誌の交換によつて今まで部誌の惠送をうけた高校生物部の方達に返礼の責を果たすことが出来よう。

生物の世界ととつ組んでゆく者に光榮あれと祈つてやみません。

## 部 記 昭和37年度

4月

- 部員募集のポスターを貼る
- 才一回生物部会 津之地部長成立
- 市内水上坂へ採集に
- 採集会(寺山)

5月

- 市内稲荷川上流へ採集に
- 霧島栗野岳へ採集に

6月

- カエルの骨格標本作製開始
- 霧島栗野岳へ採集に

7月

- 純心高校「野草展」を観覧
- 霧島採集旅行 鹿兒島駅→湯之野  
湯之野→大浪池  
湯之野→高千穂河原  
→林田温泉→鹿兒島

//月○採島袴腰で海産物採集

- 市内磯海岸で海産物採集
- 文化祭
- 部誌原稿集め

//2月○部誌発行予定

## 鶴丸高等学校生物部員名簿

1962年12月現在

顧問	越山正三	鹿児島市草牟田町4053
〃	宮地伸夫	〃 原良町1241
ROOM	[氏名]	
34R	北本政文	鹿児島市玉里町133
〃	中間幸敏	〃 樋之口町3480
33R	川野勝彦	〃 加治屋町25
38R	中野紘子	〃 上荒田町736
22R	津之地浪穂	日置郡松元町上谷口951
24R	大園正行	鹿児島市塩屋町334
〃	野添千代子	〃 持木町733
〃	吉国清子	〃 高麗町170
29R	宇和誠一	〃 呉服町1
〃	北山武宣	〃 新照院町158
〃	坂元毅	〃 武町570
〃	向静代	〃 常盤町334 橋野方
11R	青山昌二	〃 常盤町919
〃	波多野尚樹	〃 下荒田町740之6
13R	久保輝也	〃 原良町1536
〃	前田宗浩	〃 永吉町346之1 山田方
〃	八並幸夫	〃 草牟田町4405
18R	大川和夫	〃 平之町1
19R	中内孝雄	〃 山之口町126

### 編集後記

四、五年前から計画だけはされてきた部誌が、先輩達の助言を受けながら、どうやら今日私達の手で「あこう」創刊号の発行までこぎつけた。

なにしろ初めての部誌発行であるため、原稿集めから発行までかなりの時間と労力を浪費した。内容やその他にまずい点が多かれ少なかれあるがたいへんうれしい。

又部誌名には、「あこう」・「ヒビスカス」その他二、三提案されたが、結局あこうは鹿児島に多いので又この部誌がたくましく生長するよいうという意から、「あこう」に決めた。

二冊、三冊……とこの部誌を進歩発展させようと、生物部員一同に誓った。

あころ 創刊号

鹿児島県立鶴丸高等学校生物部部誌

発行日 : 1962年12月24日

編集者 : 津之地 浪 穂, 大 園 正 行

印刷 : 鹿児島市山下町75番地

明るい窓社 電話 09-7385

鹿児島市加治屋町鶴丸高等学校生物部